

## 地区内を通る

## 4街道と浅川



浅川扇状地の緩やかな傾斜地から千曲川の氾濫原に広がる平地が古里地区(旧古里村)です。この旧村内を、東山道(支道)(旧北国街道)・飯山街道・上州街道・山道街道の4街道が通り、信州と越後・上州を結ぶ交通の要所でした。その道は今も区民の生活道路として生きており、その道端には70基を超える道標・石塚等があります。

浅川扇状地のため、生活水を得るために井戸を掘り、灌漑用水・溜池を造り、千曲川の後背湿地の平地では、排水路を掘り開田し、裾花川から用水を引き、稲作耕地に変えてきました。村を東西に二分するように流れる浅川は、大雨のたびに氾濫を繰り返し、土砂が耕地を覆ってきました。古里の歩みは浅川との闘いの歴史でもあります。

## 西三才神社



昭和50年(1975)、区民の親睦融和をはかり子供たちに日本の伝統である祭りの良さを知って欲しいと有志156名が崇敬会を発足させ、三笠台公園内に社殿を設け、天照皇大神を祭神として遷宮祭を行いました。平成13年(2001)には、区民による西三才伝統文化振興会が発足し、管理と行事の運営をしています。平成19年(2007)、社殿は区民の手によりJR三才駅近くの区有地に移され、8月に記念式典が行われました。

毎年9月第2土曜日に開催される秋祭りでは、育成会が中心になって手作りの子供みこしが町内を回り、手作りの仕掛け花火が行われます。また地区外から獅子神楽を招き奉納しています。





豊かな彩り、大いなる夢

## 古里の未来地図

1



古里地区の各公民館では、市制100周年時に、「こんな街になったらいいな」と願いを語り合い、自由な発想で古里の未来図を描きました。

未来図には、「住みよい地域にしよう」という地域の皆さんの思いが込められています。なお、現在運行している「東北ぐるりん号」は、これらの夢が実現したものです。

上の未来図は、各公民館で作成した未来図の中から一部をご紹介します。

### 【三才老人天国】

農園や遊歩道などの整備による高齢者にやさしいまち

### 【三才ドリームマップ】

人と自然が融合した賑わいのあるまち

豊かな彩り、大いなる夢

## 古里の未来地図

2



古里地区の各公民館では、市制100周年時に、「こんな街になったらいいな」と願いを語り合い、自由な発想で古里の未来図を描きました。

未来図には、「住みよい地域にしよう」という地域の皆さんの思いが込められています。なお、現在運行している「東北ぐるりん号」は、これらの夢が実現したものです。

上の未来図は、各公民館で作成した未来図の中から一部をご紹介します。

【フレッシュマザーズ】

水辺公園・展望台などの整備や伝統文化を継承していくまち

【KANEBAKO ~私たちは金箱を作る~】

総合運動場の整備によるスポーツ振興のまち



## 中俣神社 太々神楽・獅子舞



中俣神社は、江戸時代この地域が柳原庄といわれたころから鎮座していると伝えられる古い神社で、松代真田家の屋敷の修理に社木を献上した縁から、六文銭の幕が使われています。

例年、この神社で行われる秋祭りで披露される中俣太々神楽・獅子舞は、女性も参加することで有名です。かつては他の獅子舞と同様、男性が演じていましたが、地区住民で結成された「中俣神楽保存会」が中心となり、小中学生や高校生を含めた地区住民全体で地域の伝統を継承しようという新しい取組が始まり、女性が舞い手をつとめることもあります。

伝統の所作の中にも、祭りと地域づくりを担う新たな世代による軽やかな獅子舞をみることができます。



## 古野神社 太々神楽・獅子舞



古野神社は柳原布野の産土神で、社殿は総けやき造り、拝殿内には峯村白齋の俳諧献額などもあり、境内の巨木はこの地区の古い歴史を感じさせます。

この神社で行われる秋季例大祭は、布野地区住民総出の賑やかなお祭りです。「布野若衆会」による手作りおでんなどの露店は子供たちに大人気で、境内からは大きな歓声が聞こえてきます。

祭りの主役は長野五輪の文化プログラム等でも披露された「布野区神楽保存会」による伝統の獅子舞です。かつて地区内の東組・西組でそれぞれ伝えられた男獅子と女獅子があり、「ほろ」と「おんべ」の舞がよく演じられます。





## 朝川原神社



朝川原神社は、北郷村の産土神で、拝殿は嘉永3年(1850)に建てられたといわれています。明治6年(1873)、長野県から郷社(神社の格付けで県社の下に位置する)に列せられており、社名は「浅川」の村名の由来となっています。建造物は、平成16年8月18日、市指定有形文化財になりました。

下

拝殿・本殿には、越後の宮大工一門によって2年の歳月をかけて彫られた彫刻群があります。拝殿の向拝には、獅子・龍等、羽目三面には、十二支彫り物が見られ、本殿の向拝には、振り向き獅子・龍に乗る仙人等、妻には、飛龍・力神等の彫刻が見られます。また、近在にもまれな立派な陽石・陰石が道祖神として安置されています。





## 八櫛神社 （ブランド薬師）



八櫛神社の創建は、寺伝によると大同2年（802）といわれており、現社殿は文久元年（1861）の再建です。社殿は、岩穴に三本の木材を打ち込み、懸崖造りに建立されており、柿<sup>こけら</sup>葺きを模した入母屋屋根になっています。この場所は、安政6年（1859）に歌川広重の「諸国名所百景」に描かれる等、善光寺参りに訪れた旅人が立ち寄る名所でした。

八櫛神社は、「ブランド薬師」として地域に親しまれています。「ブランド」が何を示すかはっきりしていませんが、「薬師」は、本堂再建時に参道に配置された十三石仏の7番目が薬師如来像（その本地仏が少彦名命<sup>すくなひこなのみこと</sup>で八櫛神社の祭神）であることに由来しています。







大豆島原産

巴の錦

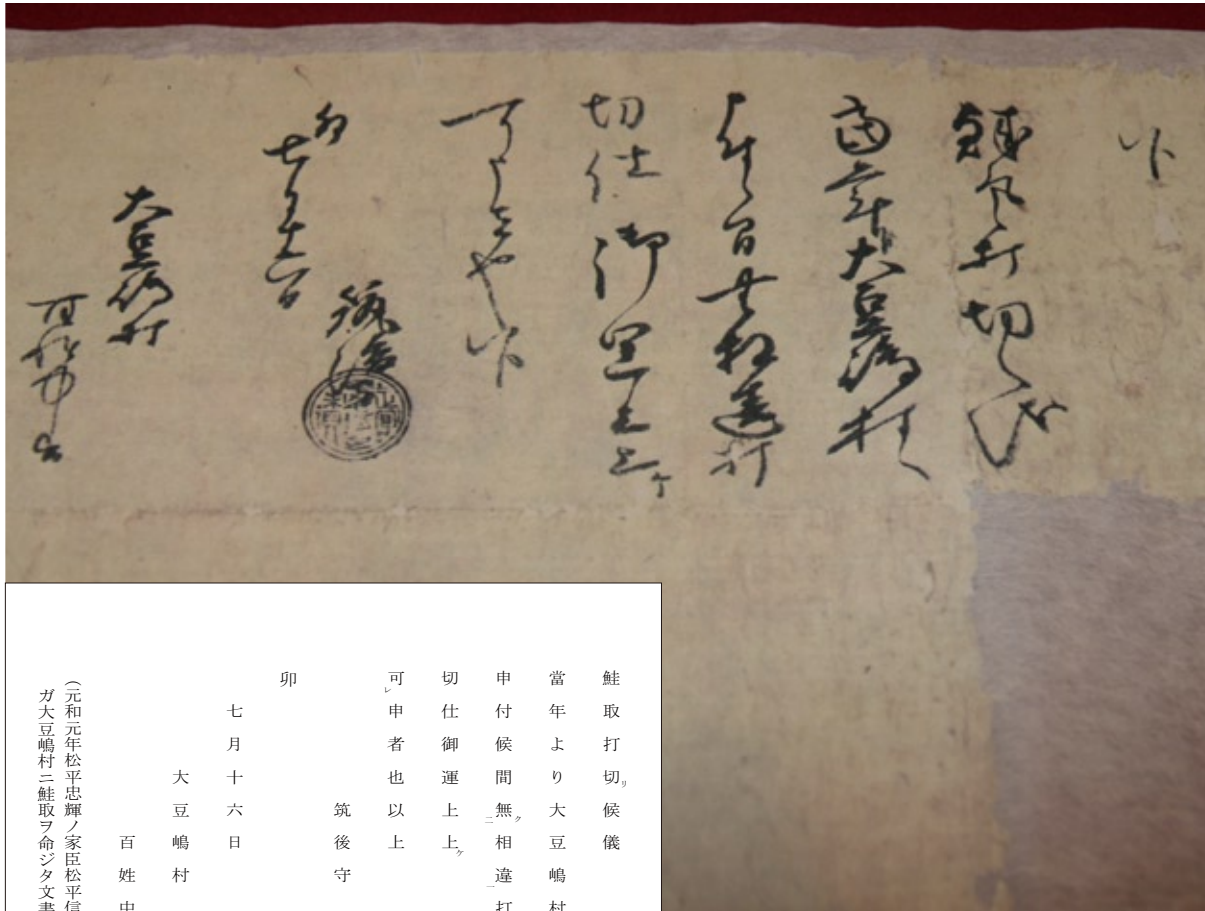
巴の錦は、大菊厚物の一つですが、一般菊と異なり、花弁の内側が真紅、外側が黄金色でそのコントラストが極めて鮮明であること、開花すると直径3cmほどの黄色の花芯が円形状に鮮やかに現れること、崇高な気品と一種独特な風格を備え持つことが特徴です。花名は、江戸時代、



参勤交代の折、善光寺参詣をした加賀藩第3代藩主前田利常(1594-1658)が、大豆島の人が善光寺に奉納した菊一鉢に足を留め、自ら筆をとって「巴の錦」と名づけたことに由来するといわれています。

先人たちが古く江戸時代より大豆島原産として、目の保養、心の安らぎ、そして近隣の触れ合いにと愛でてきた巴の錦は、かけがえのないお宝です。

## 大豆島区有文書



(元和元年松平忠輝ノ家臣松平信直  
ガ大豆嶋村ニ鮭取ヲ命ジタ文書)

卯  
 七月十六日  
 大豆嶋村  
 百姓中旨  
 筑後守  
 可申者也以上  
 切仕御運上上、  
 申付候間無相違打  
 當年より大豆嶋村  
 鮭取打切候儀

大豆島区有文書は、松平忠輝(1592-1683)が高田藩主だったとき、重臣の松平信直が大豆島村に与えた鮭の「打切」<sup>うちきり</sup>を命じた貴重な文書で、写真は元和元年(1615)の文書です。「打切」とは、岸から川の中へ杭を立て連ね、これに竹簧<sup>たけす</sup>を渡し、その簧の下に「ツツ」という竹製の筒のようなものをしかけることをいいます。通い舟の通路だけを開けておきますが、川を切って仕掛けを作るので「打切」といわれ、打ち切りをした岸には仮小屋を造り、7月から12月まで鮭漁をしたといわれています。

このほか、慶長16年(1611)、元和4年(1618)の2通の鮭に関する文書があります。